



今月のことば

Words of the Month

温故知新

日本弁理士会副会長

船津 暢宏

【熊本地震】

「ドーン」と突き上げられる突然の強い揺れと家が「ミシミシ」ときしむ音に一瞬、家が壊れるとの恐怖を感じたのは、平成最後の正月の2019年1月3日夜の熊本の実家に居たときであった。地震は、震度5弱ではあったものの、揺れの時間が短く実家では大した被害はなかったが、3年前の教訓から、この地震に続いてもっと大きな地震が発生するかもしれないと、年老いた母と二人で懐中電灯とラジオ等の準備を行った。

3年前の熊本地震で、2016年4月14日に発生した前震では、熊本市内の実家は無事だったが、16日の本震では鬼瓦が落ち、壁にひびが入り、塀が倒壊するなどの被害を受けた。既に修理を済ませたものの、3年前の規模の地震がまた発生すれば古い実家は修復不能に壊れてしまうのではないかと危惧している。

「災害は忘れたころにやって来る。」熊本の旧制第五高等学校（現熊本大学）を卒業した寺田寅彦の言葉と言われているが、今回は忘れていなくてもやって来るものだと実感した。

寺田寅彦は、旧制五高時代に物理学者の田丸卓郎と英語教師の夏目漱石に師事し、物理学と文学に深く携わった多才な先人である。

母校の熊本大学には、旧制五高時代の赤レンガの校舎が歴史博物館「熊本大学五高記念館」として国の重要文化財に指定されて残っており、明治の雰囲気醸し出している。しかし、その記念館も3年前の地震で被災し、残念ながら復旧工事で長期休館中である。

幕末の歴史好きとしては、熊本の横井小楠（しょうなん）を紹介しておきたい。小楠は、勝海舟から、西郷南洲（隆盛）と並んで天下で恐ろしい人物と評価されたものの、世間ではあまり知られていない。勝海舟の「氷川清話」によると、小楠の柔軟な発想力と高い適応力を評価してお

り、小楠の思想を西郷の手で行われたとある。

小楠は、福井藩の松平春嶽に請われて福井藩の財政再建に手腕を発揮し、江戸幕府の政事総裁職となった春嶽のブレインとして幕政改革にも関わった。維新後は新政府の指導部の参与として、新国家のビジョンを説いて実行に尽力したが、明治2年に暗殺される。60に近い年齢で参与に抜擢されたのは、小楠が明治政府にとって重要な人物であったことをうかがい知ることができる。

熊本市の東の秋津町沼山津に小楠の家塾「四時軒」の屋敷が残されており、2015年秋に訪れた。この場所は、坂本龍馬が何度か訪問して日本の将来について議論した所でもある。縁側から眺めた野山の景色を龍馬も見ていたと想像したら、幕末の志士の気分になったことを思い出した。

龍馬が後藤象二郎に示したと言われる「船中八策」と小楠の福井藩時代の弟子の三岡八郎（由利公正）が草案した「五箇条のご誓文」には共通点が多く、これらは、小楠の卓越した政治思想に基づいていると容易に想像できる。

尚、「四時軒」は、熊本地震の被害により現在休館中であるが、隣接する横井小楠記念館の資料館は公開されている。地震から3年が経過するが、熊本城をはじめまだまだ復興・再建途中の歴史的建造物が多い。

【技術革新】

幕末・維新から現在に目を転じると、ネットワークのグローバルな広がりやスマートフォンの普及、AI（人工知能）の進化、ビッグデータの利用、キャッシュレス化、ブロックチェーンの利用、自動車の自動運転の本格化等、益々技術革新が多面的に同時進行することは間違いない。そして、まだまだ多くの予想を超える新しい技術が生まれてくる可能性も大である。

1980年代初頭にアルビン・トフラーの「第三の波」を読み、トフラーが予見した未来に衝撃を受け、これからの情報革命の到来を確信して電機

メーカーに就職したのが私の本格的な技術の出発点となった。その当時のテクノロジーとは比べ物にならない程の早くて激しい変化が現代に訪れている。

それも、IT（情報技術）サービスは、様々の分野で並列に、それもグローバルに発生し、展開されている。日本のスタートアップ、ベンチャー企業が、外国の企業と連携したり、外国に開発拠点を設けたり、サービスの提供先が外国であるというケースが増えてきている。

また、自前主義の限界から、最新の技術を外部から自社内に導入するオープンイノベーションの流れがある。オープンイノベーションは、大企業からベンチャー、中小企業まで積極的に進められており、自社のコア技術を強力でサポートする外部のイノベーションを発見・発掘して自社内に効果的に移植しようとしている。

このような多面的に進む技術革新の時代において、様々な分野でAIとビッグデータの活用は益々進むことになる。

昨年1年間、所属する会派のAIの研究会で、AIと知財のかかわりを勉強させてもらい、AI関連発明の権利化、AIによる業務の効率化、AIユーザ・ベンダーへの弁理士のアプローチ等を検討した。AIは、ソフトウェアの業界だけでなく、農業、医薬、流通等の幅広い業界を巻き込み、社会全体を大きく変えるものとなる。更に、我々の知財の業界の在り方も大きく変革させるものであることが分かってきた。

また、ビッグデータの活用自体が、大きな産業に育ちつつあり、データの技術的分析や利用に弁理士が深く関与することが多くなることが予想される。

[弁理士への期待]

我々弁理士は、これまで知的財産の出願・権利化の代理業務を主に行っているが、スタートアップ、ベンチャー企業の動向やオープンイノベーションの流れ、AIとビッグデータの活用を考慮すると、出願代理にとらわれない多様な活動が弁理士に求められている。

例えば、知財の知識を十分に備えていないスタートアップ、ベンチャー企業に知財の重要性を説明し、自社の技術を知財で守りつつ、ビジネス展開に向けて他社との連携に知財の活用を経営者と一緒にプランニングして企業をサポートすることが必要になる。

特に、技術契約において弁理士は当事者の技術

内容を深く理解した上で、複雑な技術関係を整理してポイントをまとめ、契約内容に知財の権利内容をリンクさせ、最終的な契約に向けて弁護士と連携し、知財を企業のビジネス展開に生かすように常に留意する必要がある。

また、オープンイノベーションにおいても、イノベーションを提供する側は知財をベースとした展開を弁理士がサポートするのは当然として、イノベーションを受け取る側も知財を最大限利用可能とし、提供側の協力を十分に引き出せるよう弁理士がサポートすることになるであろう。

更に、AI・ビッグデータの活用時代に、AIの技術、データの取扱いを理解した上で、ユーザのビジネス展開にAI・ビッグデータが有効に活用されるようサポートする必要がある。

これからの技術革新の時代に、企業活動の様々の場面で、我々弁理士の活躍の場は広がっていると言える。ただ、その状況でのマニュアルはないし、刻々と変化する状況では、対応をも変化させなければ、すぐに現状にそぐわなくなる。

技術革新の時代は、我々弁理士の実力が真に試されるときでもある。出願代理の枠を超えて、どこまでお客様のために寄り添うことができるかが課題である。

[温故知新]

このような多面的で変化の激しい技術革新の時代は、混沌とした幕末・明治の時代と重ね合わせてしまう。

前述した横井小楠と寺田寅彦を引き合いに出すと、現代においても必要とされるのは、幕末から明治への時代を切り開いた小楠の柔軟な発想力と高い適応力、更にはビジョンを持っての実行力であろう。そして、寺田寅彦のように多方面への強い関心を抱いて、複数の観点で物事を深く捕らえて行くことが肝要となろう。

[結論]

これからの技術革新の時代に、まだまだ、我々弁理士の働き方について知恵やアイデアを出し続けて行かなければ、弁理士自身が時代遅れになってしまうかもしれない。

しかしながら、これからの時代を見据えて、弁理士が柔軟な発想力と適応力によってビジョンをもって実行して行けば、新しい時代での道を開くことができ、弁理士に寄せられる新たな期待に応えられるものと確信している。